皆其功に依る

英國會衆派の名士ドーソン氏一日シカゴ市のバーモル學館を訪ふ此學館はシカゴの豪商バーモル氏が其資産前後凡六百萬金を投じてプリモス教會前牧師ゴンソーラス氏に托し工業教育と人物の丹練を並行せしむべき目的にて設立せしものなり、今や同館に就學する者一千三四百の多きに及べりと云ふ、教室や工場其他を巡視する折柄ゴ博士圖書室に相對座せる兩青年を指して云ふ其一人の父は年收入拾萬圓を有せる者にて今一人は貧家の一子なり君は孰れを孰れと見分け得るやと、ド氏は能せずと答へしにゴ氏欣然として曰く。

夫れがデモクラシー(共和民政)である、豪富の子弟も我輩の許に其子弟を送り來りて他にて得られぬものを此學館で得ることが出

來、又た貧者の子弟も此學館に就學の出來ぬものはない、而して我輩は其間少しも差別を設けない萬事は其功に依る(Merit rules)

嗚呼實力を以て人を遇す是れ實に米國の今日ある所以の一大秘訣にはあらずや。

老教授の氣焰

羅馬史の著者として高名なるベルリン大學教授モムセン氏は獨國政界の亂調を見て憤慨措く能はず一篇の長論文を公けにして萬丈の氣焰を吐いたそうで其中には先般新閥稅案の討議に際し保守黨と國家自由黨を聯合して其通過を計りたる政府の計略を攻擊し侃々政客

の墮落を痛論して殆んど餘力を剩さゞる勢である、博士は無論社會黨ではない同黨の行動に就て批難したることもあるが、然しながら凡そ公平なる政治家が國民を分つて一を國憲秩序を奉するの黨派、他を革命を目的とする黨派なりと分稱するの謬妄なるを絶叫して、獨逸將來の救濟者は社會黨に待つの外なしと論じた、超然として國家の重きを任へる學者の高風卓節誠に欽羨に堪えないではないか、同じく伯林大學の倫理學教授パウルゼン博士の如きもモ氏と同説で熾んに論難したソウである、學者の價値がソコに現はれるのである、顧みて我が國の學者先生達を見ると政府の前には平身低頭して所信を述べ得ない連中が多い、又た偶ま少し氣骨を有する人があれば抽象的研究にまで立ち入つて其の口を箝めんとするのである、歎しい次第といはねばならぬ。（明治三十八年）

獨立自尊翁の見識

吾人は福澤先生一派の道德主義に就ては感服し得ざるものであるが、翁が獨立特行權勢に侯らず世論に媚びず其の所信を公言して一生を貫きたる氣節に至つては學者たるに耻ぢないと思ふ、翁が逝かれてから早や三年であるが同社中の人々のみならず社會がその人物を敬慕して忘れないのは當然である、去る明治二十年、時の文部大臣森有禮氏の諮問に答へて、文部省撰の倫理教科書を批評したる一文を此頃時事新報に掲げたのを讀むだ。

凡そ德教の書は古聖賢の手に成り又た其の門に出でしものにして主義の如何にかゝわらず、天下後世の人が其の書を尊信するは聖賢の德義を尊信するが故なり、支那の四書五經といひ印度の佛

經といひ西洋のバイブルといひ孔孟、釋迦、耶蘇其の人の德高きが故に書も亦共に光を生じて人と共に信を得ることとなり……然るに今倫理教科書は文部省撰とあり省中何人の手に成りしや、其の人は果して完全高德の人物にして私德公德に欠くるところなく以て天下衆人の尊信を博するに足るべきや諭吉に於ては文部省中にかゝる人物あることを信ぜざるのみならず日本國中に其の有無を疑ふものなり、或は此の撰は一個人の意見にあらずして一省の協議になりしものなりといはんか、取も直さず本政府の選びたる倫理論なり、然らば即ち今の政府を日本國民一種族の集合躰として此の集合躰は果して德義の淵叢にして特に百德の根本なる私德を重んじ、身の內行を嚴にして常に衆庶の景慕するところなるやといふに諭吉又た之を信ずるを得ず云々。

翁の十有六年前の鑑識は不幸にして違はなかつた今回の教育界の慘情に鑑みて當局者も思ひ當ることであらう。（明治三十六年）

思索力を與へよ

故英國首相バンナーマン氏はミルヒル中學の壹百年紀に臨み演說し問ふて云く「生徒等は考ふることを教へられしか、斯る問を發するは奇怪に似たれど思索の欠乏は當代の大危險と退歩たるは事實なり、我等は事件より事件に戰爭より戰爭に、地震より地震に議論より議論に小說より小說に……轉々して未だ曾て自ら其立場を確立することをなさず、重大なる問題に付てさへ自ら考ふることをせざるは國民大多

數の通弊である、是れは我國民生得の一欠點である、我々が輕浮で判斷が確かでないと評されるは無理ならぬ、畢竟文學の普及は其最も大なる原因であらうと思ふ、我等の信仰と說とは多く他人の著述又は新聞から之を取るのである……今日の青年をして自ら考へ自ら其思想を定めしむるは敎育上の最大要件である」と豈に只英國民のみならむや。

日本敎育上の意見

更に日本人の敎育に就き米國スタンフォド大學總理ジョルダン博士の意見を紹介したいと思ふ、敢て嶄新なる意見と云ふべきものもないが平生最も深き同情を本邦人に寄せ排日熱の熾んなる加洲の中心に居ながら侃々日本人の爲めに辯護の勞を敢てし恐るゝことなく、且つ敎育の經驗に富み純潔の人格として仰望せらるゝ博士の言として

本邦敎育者、宗敎家等の傾聽に價いすべしと信ずるのである、就中第一第二、第四項の如きは我邦人にとりて最も適切なる敎訓にはあらざるか。

第一、日本人の敎育に必要なるは第一個人性を更に發展すること

第二、正義の觀念は禮讓の觀念よりも重かるべきことを理會せしむること

第三、罪惡に對する良藥は單に之を禁遏するにあらずして却つて個人の道德を高むるに在ること

第四、家庭は修養と純潔の中心なれば婦人の敎育に最も力を盡くすべきこと

第五、敎育の最終目的は官吏を養成する爲めに非ず又智識蓄積

の爲めにも非ず唯だ事業を爲し得る力を發達せしむるに在ること

佛國精神界の異彩

晩近佛國の精神界に一種の異彩を放つて居るのはチャールス、ワグチル氏である、弊習の充滿せる佛國舊敎の中心に於て基督の福音を說き、浮華豪奢を極めたる首都の中央に在りて一團の有志を糾合し「道德實行會」を組織し、滔々たる一代の頽瀾と戰ひ文壇に講壇に侃々として倦まざるの氣慨を遙想して誠に賴もしく愉快に感ずることである、其著述は多くは靑年の爲めに執筆したもので「靑年」と題したのは先年

英語に譯されて英米の宗敎社會よりも大に注意せられたが此頃又た「簡易の生活」といふのが翻譯になつた、文意徹底、事理明確實に稀有の快書である、且つ其思想の雄健なると其理想の高潔なる妙文達筆と相俟つて爽快極るの感がある。

カーネギー氏と禁酒主義

カーネギー氏の「實業の帝國」は我國にも翻譯が出て居る、もし本邦の所謂實業家等が此の如き書物を熟讀玩味したらんには大に發明する所あるであらう、近頃英國「評論の評論」記者ステッド氏がカーネギー氏の人物性行を叙せるものを見たるに敬服すべき敎訓を學ぶとが少な

からぬのである、其中にて氏が青年に對する實驗談は最も聞くべきの價値がある、今より十七年前ピッボルクに於て青年に向ひ演說したる中に云へるやう「米國青年の前途に横はる二大危險は飲酒と投機と相互の融通の爲めに切手の裏、書をなすことである」と云つた、又曰へるよう「諸君は何等の誘惑に罹りたりとも又是を改むるを得べしと雖も酒に對する狂的渴望より免るゝは殆んど爲し能はざることなり予は唯少數の除外例を知るのみ」と、又他の或る場合に云つたことに氏は飲酒の僻ある青年は假令如何に才氣を有するも決して採用せぬ、その才氣が大なる程失望することも大きいと云つたこともある、氏は又た喫煙が大嫌ひであるソウで、スキボーの氏の邸を訪ふ人々は庭園の樹の下に行つて煙を吹くと云ふことである、飲酒と喫煙がなくては世渡りは出來ぬと思ふ我邦の青年諸士は之を讀で如何に考へらるゝであらう

か。（明治三十六年）

醫學博士と飲酒

世界に於ける外科醫界の一泰斗と仰がるゝ墺國のローレンツ博士が先年米國遊歷の折柄一日紐育市に於て多數の醫士に招待せられその饗應に預りしことあり、其席上氏が唇を酒杯に觸れざるを見て傍なる或人が博士は禁酒家なるや否やを質したるに答へて左の如く答へられたりと。

予は所謂禁酒遊說者には非ず予は一の外科醫なり、予の成功は全く明白なる腦髓と鞏固なる筋肉と確然たる神經に依るなり、然るにもしアルコール的飲料を使用せんか予が鋭刀の上に常に保持すべき肉體の諸能力を害せざることなし、外科醫として予は酒を

用ゐること能はざるものなりと

大統領と喫煙

先年米國の或處にて大統領ローズヴェルト氏が喫煙家なるや否やに付議論相分れたる結果、華盛頓に照會したるに早速秘書官ロイブ氏は電報を以て左の如く返答せりと。

「大統領閣下は未だ曾て何種の煙草をも喫煙せられたることなし」

休　息

日曜の朝何れの會堂にも出席せず宅に在り、偶ま書架にありしジェ

ー、エッチ、チョウエット氏の說敎集を取り出でゝ讀む、中に休息と題する一篇があつた、馬太傳十一の二八、二九、凡て勞れたる者亦重きを負へる者は我に來れ、われ爾曹を息ません云々の句に基きたる說敎でその諄々たる敎訓は我身にとりて甚だ適切なるを感じた、要は今日の信徒が靜養を樂むことの足らざるを戒めたものである、氏は休息と氣樂の區別を述べていふ、氣樂は催眠劑である、休息は興奮劑である否な寧ろ滋養である、氣樂は勞力の敵である休息は隱れたる財寶である、又いふ「勝利ある戰爭の秘訣は永久の平和である、凡ての成功ある活動に欠くべからざる要素は深き永續せる休息である」と、吾等の休息は休息の爲めに非ず大に戰はんが爲めである否な沈思靜肅、神と俱にあるの信念と、これより生じ來る平和喜悅は卽ち邁往敢爲の動力をして內に充溢せしめ、已むに已まれぬ眞勇氣を振起せしむるの源泉である、吾ら希く

は此覺悟をもて休暇を善用せん哉。

佛國民と安息日

文明の進歩、社會の變遷と共に安息日の習慣も段々移り變はりつゝある、西洋で最も安息日の勵行さるゝのは蘇國で英米之に亞ぎ米國でもピユリタンの遺風を襲へる新英蘭地方は西部と比して著く異つて居る、併し此十餘年來英米の各國でも昔の樣にはないとの評である、處で從來安息日を守る習慣の緩漫なのは歐洲大陸であつて、「大陸の日曜日」と英米人が常に嘲弄して居る位である、就中佛京巴里となつては只だ宗教的に此日を守るものがないのみならず勞働を休むの慣例も絶えんとする狀態であつたが、不思議にも社會主義が漸く地盤を得來りし結果佛國政府は今度新たに勞働法案を施くことゝなり法律に依て

日曜日の勞働を禁止することになつた、斯くて偶然にも舊約時代の安息日制度を復興することゝなつたのであるが宗教的聖日として之を守るまでに至らずとも「安息日は人の爲めに設けられたり」てふ一面の眞理が千古易りないことを證明して居るのは面白い。

日曜日の守り法

倫敦の著述家、說教者マイヤー氏日曜日の守り法に付て云く「日曜日を有益に滿足に過すの秘訣は平生と全く一新した心持で送ることにある、之を靜かに守ると云つて寢轉んで半日を過すは益ないことである、先づ之を家族日として平生は家內子供と一所に會談する機會の少い人は此日に家族の團欒を進むるの心掛が必要である、又子供に讀物を供するは善いが教科書や感情的小說などを避けて高尙なる說話、物

語等を與へることが大切である、殊に良傳記は凡ての基督信徒の日曜の讀物として適當である、之を要するに日曜日を靜肅にするは肝要なれど之を樂しく又有益にするの心得が必要である」と云つて居る。

想苑

想苑

人生の岐路

人生危機多し、然かも其最大危機は實に青春妙齡の期即ち人生の花の時期にありと爲さゞるべからず、花の時期とは男女齡凡そ二八の前後に於けるを云ふ、是れ獨り宗教家の理論にあらず、心理學者が事實を基礎となせる統計的研究の結果も亦之を證明して餘りあるなり。

宗教心理學の著述を以て名を知られたるスターバック氏の結論によれば宗教心の萌芽は七八歳より始まり十二三歳に於て著しく進歩せるを認む、其最も活動せるは即ち十六歳より十七八歳までの頃にして宗教上の決心者を起すは人生中孰れの時代よりも此交に於て多きを見るなりと、此轉機は即ち人生中の一大轉機なり、宗教心の活動は

其眞面目を表す、其人生の目的に就て去就進退を決すべきを自覺せるを見るべし、何ぞ只だ職業の撰擇を決するのみならんや、其一生の品性も此時に於て決すべく其嗜好亦多く此時に於て定まるものと云ふべし、切に之を云へば善人となるも惡人となるも有用の材となるも無用の贅物となるも多くは此年齡に於て決する者と云ふも決して過言ならざるなり、世の父母たる者動もすれば十六七の青年男女を以て未だ乳臭を脫せずとなし思慮淺薄なりとし之が爲めに人生の大事を語るの時に達せずしとて放擲する者あり、敎育家、宗敎家の如き亦同じく彼等を以て尙共に宗敎道德の大問題を語るに足らずとなし寧ろ放任して其意に任かすを智なりとなすに至る、殊に本邦の敎育家中には是等青年が宗敎を研究し又は之を信ずるが如きは不可なりと主張する者少からざるが如し、是れ一は宗敎の何者たるを解せざるに出づと雖も

亦深く人性を究めざるの致す所と云ふべし、もし一たび此危機を過ち一身を誤らんか終生臍を嚙むも及ばざることあらむ。吾らは常に宗敎々育は幼稚時代に於て著手せざるべからざを主張するものなるが、その最も力を致し決心を促すの最大時期を以て男女青年の中學時期にあることを信ずる者なり、品性鍛練の時期此時にあり宗敎的改心の好機此時にあり、此機一たび去らば其去ること遠きを加ふると共にますます困難なるを思はずんばあらず。

寄語す各地中學、高等女學及び其程度諸學校に在る數千の青年諸子諸君が人生の危機は實に此時に在り、今は眞面目に人生の問題に對して熟思すべきの時なり、希くば諸君が斷然其の方針を定め正義の友となり人道の旗下に屬し以て一生の戰場に出るの決意を爲さんことを、然らば卽ち國家の爲めに社會の爲めに盡すの途、亦自ら明白ならむ、その

職業の何たるを定るが如きは抑も枝葉なるのみ、基督曰く「爾曹先づ神の國と其義を求めよ然らば此らのものは皆爾曹に加へらるべし」と敢て諸君の三省を祈る。

人生の疑問

那珂文學博士の姪、藤村某人生の疑問に惱み煩悶の極み死を決し、日光華嚴の瀧より身を投ず、那珂博士の記する處に依れば彼幼にして大志あり學力衆を拔き友人の間に敬愛せられしが、哲學を究めて人生の迷夢を醒さんと欲し、本年第一高等學校に入り好んで哲學宗教の書を學び居たりしが、本月二十一日の朝家を出でゝ日光に至り華嚴の瀑の上なる樹を削つて一文を記し「去て返らず消えて痕なく」なりぬ、慘の又

慘、誰か同情痛哭の涙を分たざるものぞ。

人生は疑問なり宇宙は秘密なり上は釋迦、約百より下ショウペンハオル、ニーチェに至るまで此大問題の爲に苦心煩悶せしもの幾萬人なるを知らず、而して其收め得たるところ幾何ぞや「悠々たる哉天壤、滾々たる哉古今」夫の好青年と共に絶望の聲を發して不可解と叫ばざるもの幾人かある、滔々たる天下浮薄の風、熾んにして敬虔の信念、地を拂はんとす、不義理の爲めに一命を失ふものあり金錢の爲めに可惜生命を棄るものは少からず而かも其着想彼が如く超俗その人品彼が如く純潔にして人生の難問を究めんとして自ら死す豈に一掬同情の涙なかん哉。

然りと雖も人生果して解すべからざる乎、洪大なる宇宙遂に吾人の心を安んずべきものなき乎。

豈に夫れ然らんや、主キリスト宣はく「身の光は目なり若しなんぢの目瞭かならば全身明かなるべくなんぢの目眊らば全身暗かるべし是故に爾の中の光もし暗からばその暗きこと如何に大ならずや」と、故に使徒パウロ曰へることあり「道は爾に近く爾の口にあり爾の心にあり是れ即ち我儕が宣ぶる所の信仰の道なり」と之を外に求めずして内に探れ之を遠く尋ねずして近きに得よ。

吾人は敢て哲學を是非せんとするにあらず、然れども無限の宇宙を究めんとするは有限なる人智の能くする所にあらず、況んやその僅かに學び得たる所を以て人生を解釋せんとするをや、眞に愚の極とこそ云ふべけれ、その偶ま哲學上より悟り至らんものは「大なる悲觀は大なる樂觀に一致する」を悟るに了らんことを恐る。

チャレース、ワグチル云へることあり。

It is not enough to believe in God, one must believe in man.....in humanity and its future.

(神を信ずるのみにては未だ足れりとせず人を信ぜざるべからず人類と其將來とを……)

彼れ貧苦の間に人と成り其父なる牧師より極めて究屈なる信仰を傳へしが、後ち巴里に遊び哲學を修むるに至りて幼時の信念は煙の如く消え懷疑こもごも至り苦悶に日を送り遂に萬事を疑ふて絶望せんとせしこと幾回なるを知らず時に年齒正に十八、偶まスピノザの書に心醉し爲めに感發せられしこと少からねど其の渴仰の念を充たすに足らざりき、彼の一言は實にその實驗に出るなり。

二年の後、彼れ故郷に還らんとして途にアルプスを過ぎその巖々として安泰せる山巔を望みて「神はわれらの避所また力なり」てふ詩を懷

起し翻然として悟る處あり、家に歸りて老母が貧苦の間に樂んで家事に營々たるを見、始めて謂へらく人生の秘密は愛なり凡そ一生を捧げて愛する者の爲めにす人生の樂事是より大なるはなしと、遂に一生を獻げて福音の宣傳と社會改善の爲めに盡瘁するに至れり、今や佛國精神界の明星と仰がれ其文名遙かに英米に喧傳せらる彼はスピノザの哲學に於て立命の地歩を得る能はず反つて之を淳朴なる慈母の胸中に見出すことを得たり、是れ決して究理の結果にあらず、自らの經驗に依て得たるなり、キリスト曰く、我を信ぜよ」と、安心立命は信仰より來る單純なる哲學に加ふるに宗教の生命を以てするにあらずんば光明ある人生觀に達せんこと難い哉。（明治三十六年）

來世の信仰

突如として生じ來るものは來世の問題なり、禁ぜんとして禁じ得ざるは人生の運命に關はる疑問なり、理論上には否定すれども尙惑を解くに足らず、冷然として放擲し去れども復た時ありて湧き來るものは此一大問題なりとす、蓋し是れ人生の衷情之を要求して止まざるに依るにあらずや。

第十九世紀の傾向が物質的なりしは論を俟たず、科學的研究の旺盛なる物質的進歩の迅速なる世界あつて以來未曾有の偉觀なりとす、是に於てか世俗は滔々として物質的文明を謳歌し、黃金を崇拜し、成功を無上の目的とするに至る、勢此の如くなれば彼の中世紀の思想の如く現世を穢土とし假りの宿として只管極樂往生を慕ふが如き傾向は自

から衰微せざるを得ず、然れば此時に當り宗教家の所説亦現世の改善に汲々として靈生の事に疎略なりしは自然の勢と云ふべし、思ふに此傾向は彼の舊思想の反動として已むを得ざるに出でしならむ、而かも稍や偏重の憂は免るべからざるなり。

宗教思想も亦社會の變動と同じく搖錘の一方より他方に振動するに似たり、一たびは來世的信仰を偏重して反つて弊害を生じたる基督教は近世に至りて現世的社會的の一方に偏倚したる觀なくんば非ず然るに最近數ヶ年の形勢を觀察するに來世の信仰に關る著書論文の見はるゝもの甚だ多く、獨り神學者宗教家の之を論ずること流行するのみならず、哲學者科學者の研究亦續々公けにせらるゝを見る、その結論に至つては固より種々あつて一定する所なしと雖も、兎に角此一問題が大に學者の注意を促せるを知るべく、併せて社會が此一大問題に

興味を感じ來れることを知るに足るなり。

曾て東京の「新佛教」記者は全國百數十の名士に問を發して來世有無の信仰を質し其答案を公けにしたり、吾ら之を通覽するに明白に來世ありと信ずと斷言せる者の多數は基督信徒なるが如し、來世無しと確答せし者は帝國大學出身者及佛徒の内に多きが如し、而かも佛徒の一部は明かに來世ありと答へたるを見れども其意義に至ては基督信徒と異なるものあらむ歟、而して吾らの最も驚くことは是の問題に對して何等の信念をも有せざる人士が多數を占め居ること是れなり、思ふに是等の人々は多くは儒教の感化をうけ若しくは明治の四半世紀を風靡したる科學旺盛時代に教育せられたる人なるべし、吾らは「新佛教」の此一擧が少からず世間の此問題に對する注意を增加したるを疑はざるなり、記者の勞豈に徒爾ならんや。

此機會に於て少しく此問題に對する所感を語らんに、吾らは或人々の考ふるが如く來世の信仰なくては宗教は成立せずと信ずる者にあらず、又た近頃一流の人の主張せるが如く靈魂不滅の理由を科學的に求めんとする者にあらず、彼の來世の狀態を手に取る如く說明せざれば宗教の本旨を得たるものにあらずとなす一流の人士に同情を表する者にもあらざるなり。

然るに世間多數の人士動もすれば來世の信仰を以て、來世に於ける靈魂の狀態に關する想像と解し若しくは此狀態に關する學說上の意見となす、彼の自ら無しと信ずと云へるもの其實は確然たる意見なきの義なり、故に一たび生死の境に入れば此疑問は禁ずべからざるの勢を以て解決を促し來るなり、或は其倫理學說に依て死は萬事の終なりと主張する者が其實際に於ては必しも其所信と符合せざるものある

を見るなり、彼の寂滅を目的とせる佛教が遂に多數の衆生に滿足を與ふるに足らずして來世に關する幾多の迷信を生じ來れるが如き深く考ふべき事實にあらずや。

世人動やもすれば我軍隊の兵士が來世の信仰に頓着なく死を見る歸するが如きを見て來世問題は人性の自然に出でずとなす、是れ思はざるの甚しきなり、彼等の中、來世の確信ある者、或は少からむ、然れども其最大多數は朦朧たる一種の信念を抱持す、彼等は茶比の煙と共に消散霧飛し去らんことを希ふものにあらざるなり、此故に彼等兵士の爲めに靈生のことを語るものあれば殆んど渴して水を求むるが如く傾聽すとは實際を見たる人の証言する所なり、假りに彼等兵士の信念少しとするも國中にある數百萬の彼等の親戚の心中を顧みれば如何、その最大多數は其戰死したる、愛子、良人、慈父の靈魂を祭らざれば止まざ

るの情あり、是れ亦吾らの實際に依て能く知るところなりとす、彼の軍隊の大勝利を報ずるに當りて遂に祖先の神靈を呼ぶに至りしものは至情此に至らざれば滿足する能はざるものあればなり、是れ靈魂消滅論者の說く能はざる所なり。

吾れ曾てブラドフォード博士に會し靈魂不滅に關する良書を尋ぬ博士は直ちにテニソン卿の「イン、メモリアム」を以て之に答ふ、該書は來世問題の議論にあらず、研究にあらず、その最も親愛せる無二の友を失へる人の感懷のみ、蓋し來世の信念は斯る眞面目の場合に於ける人性の最深奥なる天眞が其まゝに發露せるものなればなり。

基督信徒の立場より見たる吾らの所信に依れば來世論は宗敎の根本問題にあらず、根本問題は實に神に對するの信仰に存す、吾らの來世的信念は神に對する信仰の自然の結果なりとす、吾らは來世を信ずる

が故に神を信ずるに非ず神を信ずるが故に來世を信ずるなり、神を以て有心的實體なりと信じ其正義を信じ仁愛を信ずる者にありては神の生けるが如く之を信ずる者も亦生くべしと信ぜざるを得ず是れ吾らの信念なり、而して此信仰は信仰にして組織にあらず、科學的研究の結果は知識にして信仰にあらず、哲學的に之を論するは學者の分なり宗敎的信仰の立場より之を見れば「信仰は望む所を疑はず未だ見ざる所を眞となす」ものに外ならず。

然れば吾らは來世論に關る哲學的、神學的講究を望む、何となれば此信仰は理性の反對するに者非ざれば也、吾らは又科學的研究を排斥するものにあらず何となれば此方面よりして信仰を助くべき新事實の多く發見せらるべきを望めばなり、然り、靈魂不滅の信念は哲學科學に依て之を說明し若しくは助成することを得べし、然れども是等の研究

の結果に依て信念に入らんとするは實に難い哉、是れ即ち木に緣て魚を求るの類なるのみ、而かも吾らは又た或人々の如く靈の實驗の爲めに一種の特別なる奇蹟靈驗を必要なりとする者にも非ず、蓋し靈性不朽の信念は人性の最も自然なる要求に外ならざればなり、而して此要求は基督の人物及其教訓に依て最も深く滿足せらるるを信ず、キリスト曰く「なんぢら心に憂ふる勿れ神を信じ又我を信ずべし」と吾らが來世に對する信念の最大根據は實に茲に存することを忘るべからざるなり。

家庭の大本

那翁第一世の佛國帝位に登るや人に語つて曰く予が今日あるは全く母親の賜なりと侍養至らざるなかりき、且つ曰く帝國の基礎は善良なる母を造るに在りと、大に女子教育を奬勵したりと云へり。

曾て米國の一雜誌は懸賞して「母親の定義」を募りしが之に應じて最高の賞を受けたる數個の答案を檢するに曰く「母親とは信仰と希望と愛の實現なり吾等に於ける信仰、吾等に對する希望、吾等の過失に對する愛なり」と、又た曰く「良人の最親しき伴侶補助者、男兒の最も賢き相談役、女兒の最善の信任者、家庭に於ける神の最良の賜、是れ即ち善き母なり」と、又た曰く「母は家庭の磁石にして諸の心を引着け之を保つものなり」或は之を「保護の天使」と云ひ「世界に於ける最も愛すべき美はしき婦人なり」と云ひ「家族のアーチの要石なり」と云へり、以上諸の答案を讀み來りて之を本邦從來の主婦に對する觀念に照し見て誰れか其相距る

の甚しきを感ぜざるるものあらんや。

吾邦人が近年頻りに家庭の改良を談ずるを聞くは吾人の最も欣ぶ所なり、而かも其云ふ所形式枝葉に止りてその根本に着目する者少きは何ぞや、それ家庭の根本は建築にあらず資産にあらざるは勿論、男女の群居に依て成るものにもあらず、必らずや其生命となり光明となるべきの人格を要す、母たる者は即ち夫れなり、母無くして家庭あるは未だ曾てあらざる也、然り而して一夫一婦の行はれざる所に斯の如き母を見出さんことは水なき所に魚を求むるよりも難し、一男一女の大道を勵行するは我邦家庭改善の第一歩なるを知らずや。

在昔(むかし)箴言の記者が理想の主婦を唱せるものは載せて其第三十一章に在り、中に云へるあり「その衆子は起ちて彼を祝すその夫も彼を讃めていふ賢く事をなす女子は多けれども汝はすべての女子に愈れり艶

麗はいつはりなり、美色は呼吸のごとし、惟だエホバを畏るゝ女は譽められん」と是れ男女互に其貞節を守るの家族にあらざれば決して見るを得ざる所なり。

歐米諸國の理想的基督的家庭に於て更に着目すべきものはその聖壇にありとす、聖壇とは何ぞや朝に皇天上帝に跪きて共に祈り或は夕に聖書を繙きて自ら省み相誡め以て家庭に於ける天父の聖旨を遂行せんとする信念を云ふなり、もし夫れ宗教的信念を排除し去つて尚ほ温き聖潔なる家庭を實現せんとするは果して能くし得べきや否や。

古人曰く「其國を治めんと欲する者は先づ其家を齊ふ其家を齊へんと欲する者は先づ其身を修む」と蓋し齊家は治國の第一義にして修身と齊家と二者完きを得て始めて強健なる國家の發達も亦期して待つべきなり、文明の競爭場裡に在つて永く國運の隆興を希ふ者豈に家庭

の根抵に留意せずして可ならむや。

教育の根抵

新文相が諸學校に對する訓令に就ては教育社會の内外に於て少からざる反響ありしを見れば是が時弊に適中したるは疑を容れざるこ
とゝして果して其目的の如く充分の効果あるべきや否やに至りては
吾人大に惑なき能はざるなり、何となれば文相の謂ふ所のもの單に取
締を嚴にすべきを云へるのみにして更に學生の氣風を作興すべき積
極的方針を示すものなければなり。

曰く「學生の本分は常に健全なる思想を有し確實なる目的を持し刻

苦勵精他日の大成を期するにあり」と何人も此語に向て異論のあるべきやうもなけれど、知らず健全なる思想は如何にして養ひ得らるべきものなるか、是れ學生の切に知らんと希ふ所のものなり、曰く「小成に安んじ奢侈に流れ或は空想に煩悶して處世の本務を閑却するものあり」と、是れ慥かに現下青年一部の傾向ならん、而かも處世の本務とは抑も何ぞや、今の教育は果して處世の本務を教へつゝあるや否や、是れ一個の疑問にあらずや、處世の本務を忘るゝの惡しきは何人も之を知る、知らず人生の目的とは何ぞ如何にして人間の本務を果し得べきや、先づ問ふべきは此の根本問題にあらずや。

文相が今日の傾向を矯正すべき鐵案として示せるものは一に學校の規律を嚴にし二に有害なる文書を禁遏し次に父兄保護者と協同し以て學生々徒をして「自ら修め己に克ち學業を成就するに專ならしむ」

るに在り、吾人熟ら文相の眞意の所在を察するに學生をして自修克己の氣象を養成せしむるを以て其極意となすものゝ如し、然り而して規律を嚴重にし又は文學を禁遏し若しくは家庭と協力して取締を密にする事が果して青年學生の克己心を奬勵するの途たるや否やは吾人が頗る疑惑を存するの點なりとす。

文相は現今の思想界に於ける種々の弊害が「敎育の根抵を搖かすに至らむ」ことを大に恐るゝものゝ如し、是れ吾人の同じく寒心にたへざる處なり、而かも「敎育の根抵」とは抑も何を云へるや、思ふにその根抵にして明白ならず徒らに枝葉に走せて青年學生を戒飾し、外部の壓迫を加へて血氣盛んなる青年を導化せんとす、偶ま以て角を矯めて牛を殺すの弊なくんば幸なり、是れ吾人が國家將來の爲めに何よりも寒心すべしとなす所なり。

夫れ自修克己は聖人も難しとする所にあらずや、孔子曰く「德を之れ修めず學を之れ講せず義を聞て徙る能はず不善改むる能はず是れ吾憂なり」と、今の敎育者は即ち聖人の難しとする所を以て之を青年學生に望む、敎育者自ら之を實行することをなさず難きを以て之を人に謎む風紀の刷新豈に得て望むべけん哉、往昔イエス人々と弟子とに告げて曰へることあり「學者とパリサイの人はモーセの位に坐す故に凡て彼等が爾曹に言ふところを守りて行ふべし然ど彼等が行ふ所を爲す勿れ蓋はかれらは言ふのみにして行はざればなり」と、今の敎育當局者たる者先づ宜しく此言に鑑みて自反せずんばあらず。

學業を成就し又は國民として其國法に從順なるを以て果して敎育の目的を達し得たりとなすか、是れ只だ敎育の一部分なるのみ、其終極の目的にはあらざるなり、青年間に煩悶者の多きは畢竟するに人生の

目的を敎ふる者なければなり、人生に對して健全なる目的を指示することをせず徒らに煩悶者を責むるは亦た酷ならずや、敎育者先づ此點に於て自ら覺悟する所なかるべからず、夫れ敎育の目的は人類をして其天賦の靈能を發揮せしめ天と人とに對する本分を盡さしむるにあり、是點に於て敎育と宗敎とは全然其目的を一にす敎育者たる者此信念に依らず徒らに藝を授け若くは規律を勵行して以て自修克己の精神を喚發せんとするも難い哉。

本邦の大儒熊澤蕃山云はく「人の見て善とすれども神の見ること善からざることをばせず人の見て惡しとすれども天の見ること善きことをば爲すべし」と是れ即ち自修の基礎にして克己の大本なり、人生の目的は成功にあらず、快樂にあらず、勵精克己にもあらず「天命を學びて悅んで之に順ひ樂んで其本分を盡くすに存す、知識を開發し學業を習

ひ德行を修養するが如きは畢竟此本分を盡さんが爲めのみ、家庭に在りて良父母たるも國家に對して忠臣たるも將た公私大小夫々の職務に忠實なるも天命に順從なるの心に基くにあらずんば如何で其根抵を得たるものと云ふを得んや、敎育の當局者たらん人、何ぞ百尺竿頭一歩を進めて敎育界の根本的刷新を計らざる。（明治三十九年）

東洋文明の單調

歐米を見たる眼を以て淸韓國を視察する者が何よりも先づ感ずることは前者の文明の甚だ複雜なるに引換へて後者のそれが驚くべき單調なるの一事にあるならん。

先づその城市に就て之を云はんか、其區劃は必ず方形又は長方形にして回らすに城壁を以てし銃眼を備へたる千遍一律の壘壁を築き、四方に同一型の城門を造りたるは孰れの城市も皆一樣にして一を見れば凡てを見たるに異ならず、之を彼のライン河を下りて沿岸に封建の名殘を留めたる城壁の皆な悉く夫れ〴〵の特質を具へて相同じからざると比して夫れ何等の對照ぞや。

更にその市街に入りて之を見れば街衢の狀や住家の構造や只だ異なるところは大小の差のみ、新古の別のみ其形式と建築法とに至つては何等の變化を見ず、之を英米の市街が皆なその特質を發揮し殊に個人の住宅に至つては甲と乙と決して相同じからざると對照して其差異の甚しきを感ぜざるものはなからん、殊に神社寺院を觀るに孔子の廟と云ひ關帝廟と云ひ若しくば佛、儒、老を祭れる三清殿と云ひ何れの

市も何れの村も其構造に於て何等の新機軸を發揮したるものを見ず、然るに足一たび歐洲に入りてその所々の大伽藍、大會堂を見よ伊太利のミラン、聖ペテロ、聖マルコ若くは英の聖パウロ獨逸のコローンの如きは云はずもがな、小市細邑の小會堂に至るまで其建造全く個別の特性を發揮して餘蘊なきを見る。

以上は只外觀に依て云ふのみ尙ほ仔細に內部の風俗習慣を視察すれば、吾人は愈々ます〳〵其單調にして變化なく、年々歲々同じ事を繰返して進歩の跡を存せざるを見るなり、例へば淸國の敎育制度を見よ進士秀才の試驗に及第するの一事は全國數百萬の子弟が唯一の目的として修學練磨する所にして年々各所に擧行せる試驗は數百千萬人の爲に競爭せらる、而かも其課題は勿論試驗の方法に至る迄數千年間殆んど同一樣の事を繰返すに過ぎず、其腦漿を絞り其知力を苦めて得

る所は何等世を利益すべき新知識と發見とを得せしむるに非ず、勞力の浪費も茲に至つて實に極れりと云はざるべからず。

顧みて本邦現今の狀態を見るに社會の制度敎育の組織清韓と日を同うして語るべからざるは勿論なり、然れども熟ら維新以前の狀態に遡りて少しく之を思へば、吾人は悚然として慷嘆に堪へざるを得ず、何ぞや我邦も亦其文明の根本主義に於ては清韓と流を同うしたるものなりしこと是れなり、本邦立國の精神もと清韓と同じからず、風土人情亦甚だ異るものあるは論を待たず、その今日ある固より一朝夕の故には非ず、然れども其城市の有樣や、住家の建築や、寺院の體裁や、官尊民卑の弊風や、社會が極めて單調にして無趣味なりしことは爭ふべからざる事にて、假りに維新以前の狀態をして尙四五十年の間進行せしめたらんには何ぞ清韓と運命を同うせざりしを保すべけんや、その今日あ

る所以のものは一言以て之を云へば泰西文明の新生命に接して、我國民的精神を覺醒し歐米の宗敎及敎育の精神に養はれたる文明制度を輸入したるに依る、是れ何人も爭ふ能はざる所ならん。

吾人は清韓國今日の情態は實に形式的敎育の中毒と稱するを至當なりと信ず、即ち人心の衷情を刺激し感發興起すべき大活力の存することなくして單に習慣制度の下に屈服して、人生の運命を卿ち之を悲觀するも之と抗爭するの勇氣なく、只だ孜々營々として人生の苦役に服するもの實に大多數人民の狀態なりとす、然れば政治の改革固より先づ着手せざるべからず、敎育の振興大に奬勵を加へざるべからず、而かも之と共に否な是よりも必要なるは人心の覺醒にしてその衷情を喚起すべき一大生命を鼓吹すること是なり、即ち人格の威力を自覺し天地よりも大なる生命の我衷に存在することを曉り仰で宇宙の大靈

に接し伏して無限の生命を飲ましむるにあらずんば是等の國民をして新元氣を勃起せしめんことは夫れ難い哉。（明治三十八年）

祖先崇拜論

祖先の遺德を懷ひ其魂魄を祭らんとするは人情の自然に出るものなれば敢て洋の東西を論ずべきにあらざれども東西兩洋の文明を對照するに當りて吾人が東洋人種の一特質として認むべきものは祖先崇拜の習慣にありと云ふも可なり、東洋の諸宗敎が其勢力を逞ふする一大秘訣は此祖先崇拜の念を滿足せしむるが故なり、儒敎神道の如きは申すまでもなく佛敎の如きすら理論には高尙なる哲理を說けども

其最も卑近なるものにあつては死者の冥福を祈るの一方便として見らるゝに過ぎず、若し是等の諸宗敎より、葬式、法事、招魂等の念を排除し去らば其餘す所のもの何程かある、祖先崇拜の念は神儒佛共通の一大信念なりと云ふとも決して過言ならざるべし。

是に於てか一の疑問あり斯の如き祖先崇拜心と近世文明の精神とは能く併行し得べきものなりや否や、淸國に於ける基督敎傳道の最大障害が祖先崇拜に存することは吾人の久しく聞く所なり、宣敎師中に在ても天道溯源の著者マヽチン博士の如きは祖先禮拜は敢て基督敎と衝突するものに非ずとの說を抱き屢々淸人の爲めに辨護の勞を執られたることあり、蓋し泰西の基督敎が如何にして淸人の祖先崇拜心を滿足することを得るやは一の疑問なりと云ふべし、我邦に於ても亦基督敎は忠孝の德を損ふとの說久しき間絕叫せられて傳道の進步を

妨害したること少からず、忠孝の念と祖先崇拜とは根と幹との如く形と影との如く相離るべからず、忠孝は生ける君父に對するの念にして崇拜は死せる君父に對する忠孝の念に過ぎず、我邦固有の神道が純然たる祖先教たるは云ふまでもなく、通俗的佛教は一種の祖先教と化し了りぬ、此點に於て佛教は神道の爲めに感化せられたりと云ふも可なり、而も日本人士の間に存する祖先崇拜心は敢て宗教宗派に限れるものに非ず、又た單に宗教に依て支持せらるゝものにもあらず、一種の國民的特性として存在するなり、日本人が其祖先に對せる敬仰の念に至りては泰西人士の到底推想し能はざるものあつて存す。

疑きに日本大海戰の報告の世界に公けにせらるゝや東郷大將の報告及其他に於て陛下の稜威或は祖先の神靈等の語あるを見て、泰西の諸新聞紙は筆鋒を揃へて是等の語を批評し或は東洋的なりと云ひ祖

先教の信徒にあらざれば云はざる所なりと冷評したる者あり、蓋し西洋人の祖先に對する觀念が日本人士の夫と大に相異れるものあるを見るべし、然れども多くの泰西人士中にありて三十年來常に日本の親友を以て自任せるグリフィス博士は書を紐育のツリビユーン新聞紙に投じて其中に左の如く云へり。

日本に於て凡ての生活は共通的なり、彼等は人事萬般一人にて其の利を壟斷する事なし、故を以て大山大將若くは東郷大將の勝利は彼等自身の勝利に非ずして全國民の勝利なり、彼等は之を以て悉く過去の歴史及全國民の訓練に基因するものとなし、將官も亦他の一兵士と同く大なる車輪の一個の齒に過ぎずとなす、東郷大將が日本海の海戰を以て人力の能くすべき所にあらずとし功を全日本の精神に歸したるも亦此の理に過ぎざるなり、加之全日本

の精神は即ち日本の皇帝陛下なり、皇帝は單に理論の上に於てのみならず事實に於ける日本國民の大元帥にして其の國民は又皇帝の兵士なり、彼等は文籍未だ完からざる古昔の時代より此の觀念を有し歷代之を實行し來りしにより今は確定の事實となり何人も之を疑ふものなく、殊に凡ての恩惠は悉く皇室の手を通して人民に與へられたるにより兩者の關係密接親和して其美き事世界に未だ其の比を見ず屢々其の君主を變更する國民の如き到底之を想像する能はざるが如し、彼等が之に對して凡ての榮を歸するは尙我々基督敎國民が凡ての榮を神に歸するが如く或は之よりも尙一層緊密なるものあり、之を延いて其の祖宗の德に及ぼすは尙子が其の功を以て父の德に歸するが如く必ずしも祖先敎の信者なるが故に然るにあらず、余をして若し日本國民ならしめば

余はアーメンを唱ふると同時に萬歲を唱へ神に感謝すると同時に皇帝及び其祖先に感謝せんとす。

グ博士の說に依れば祖先崇拜の精神と基督敎の信仰は併行し得るものとなすに似たり、吾人は祖先を崇拜するの精神は必しも獨一の神を禮拜するの信仰と矛盾するものにあらずとなすに於てグ氏と其意見を同ふするものなり、然りと雖も宗敎としての祖先禮拜敎と獨一神說を固執する基督敎とは衝突する所なしと云ふ者にあらず、基督敎は如何にして祖先崇拜の人情を滿足し得べきや、將た又祖先禮拜敎が國民に及ぼせる感化は果して如何。

祖先崇拜の精神は必ずしも一神敎と撞着するものに非ず、猶ほ忠孝の念が敬神の心と矛盾せざるが如し、猶太人は一面より見れば祖先崇拜心の最も著しきものなりしことは明白なり、彼等がアブラハム、モー

ゼ、ダビデに於ける崇敬心の盛んなりしは其歴史が彰々乎として證明せる所なり、然れども彼等は是と同時に純然たる唯一神教の信者にして造物主の外に何物をも神とせざりしこと亦た人の能く知る所なりとす、蓋し人に對する感恩の情と造物主に對する禮拜の念とは能く併行し得べきものたるや疑を容れざるなり、然りと雖も祖先を祭りて神に代へ之を禮拜して以て足れりとなす所謂祖先禮拜教に至りては到底基督教と一致せざるは勿論、是が社會に及ぼせる影響に就ては吾人が深く熟慮研究を要する所なりとす。

祖先崇拜の念は自重の精神を奬勵するの功あり、之を小にしては一家を敬するの念となり大にしては國家的觀念を助成するの功あらん即ち小は鄉黨の一致を助け大は國民の團結を固うするの功あること疑ふべからず、又尙古の精神は古來の美風良俗を保存するに於て欠く

べからざるものなり、是等は祖先崇拜心の善良なる結果として何人も異議なき所ならん、然れども更に其弊害に就て一考せよ、吾人は議論よりも實證を看るに若かず、祖先崇拜教の弊害を知らんと欲せば現今清國の狀態を一考して其因て來る所を究むるに若かざるべし。

蓋し今日の清國の如く祖先崇拜心の熾んなるは古今無双と云はざるべからず、清國の社會は祖先崇拜の上に立てりと云ふも可なり、何となれば今の儒教は祖先崇拜教にして儒教は即ち清國の生命なればなり、清人が孔夫子を祭るは即ち其復古的精神を敬仰する所以なり、孔子曰く述而不作信而好古と、堯舜は彼の理想的人物にして其治世は即ち理想的社會なり、黄金時代は太古に在りし者にて將來に期すべきものに非ず、故に改善は常に復舊を意味す、若し之を極端に應用すれば進歩なく變化なし、只管全力を盡して舊體を維持し習慣を保存するを以て

最上の善となすなり、思ふに孔子の意は決して斯る極端の守舊主義を唱道せんとせるにはあらざるべし、或は云ふ溫故知新と、又た大學には論語を引照して日に新に日々に新なるの德を稱揚したることあり、何ぞ唯だ徒らに復古をのみ是れ奬勵すと云ふべけんや、而かも其根本的精神を尋ぬれば是にあらずして彼にあり、即ち其論理的結果として祖先崇拜敎に至らざれば止まざるは儒敎の精神遂に然らざるを得ざるものあるが故にあらずや、而して之を實行して其絶頂に達したるものを今の清國人民なりとす。

清人の祖先崇拜や實に至れり盡せり、彼等が死者に對するや寧ろ生者に優るものあり、單に死者を葬むるに莫大の費用を以てするのみならず、其親に對しては三ヶ年の喪を守り、喪中にありては只其親の遺志に背かざらんことを是れ務め家居を始め百般の舊習を及ぶだけ變更

せざらんことを之れ旨とす、蓋し三年父の道を改めず之を孝と云ふの主義を實行せば勢、是に到らざるを得ず、されば衣食住より制度風習に至るまで古きは二三千年、新しきも幾百年の久しき毫も變遷の跡、進歩の徵なきもの吾人は獨り支那文明の上に於て之を認むるを得るなり、清人の自尊心は彼等の祖先敎に基く、其保守固陋の精神も亦た彼等の祖先崇拜に依る、其時勢の進運に後れて遂に今日の悲運に陷れるもの吾人は主として其祖先崇拜敎の結果なりと云ふを躊躇せざるなり。

德川治政の間我社會を支配したる最大勢力は儒敎主義にして清國と同じく尙古守舊の精神なりき、此時に當りて稍や異彩を呈したるものは陽明派の學者にして、他の所謂腐儒と其儕を異にしたる者なりしかば異端外道として甚しく迫害せられたるなり、王政維新の曙光を叫び開國進取の國是を唱へたる志士が儒敎の正統なる朱子學者の間に

出でずして異端なる陽學派の間に出でしは決して偶然にあらざるなり、是故に我が王政維新は之を思想界より見れば儒教の守舊主義を破壞したるものと云ふべし、彼の御誓文に「所謂智識を世界に求め大に皇基を振起すべし」と云ひ「舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし」と云ふが如き即ち我が維新の精神が祖先崇拜以上の大精神に則とりしものなるを知るべきなり。

今や戰勝の結果國民的自覺心は勃然として起り來れり、自然の結果にして敢て咎むべきにあらざれども、此時に際して甚だ肝要なるは我國民が今日の狀態に滿足することなく又た徒らに自負自尊に流れざらむこと是れなり、武士道は可なり然かも日本將來の發展は武士道以上のものを要す、啻だに國家の精髓を發揮するに止まらず驕奢を誡め自ら足らざるを感じ、理想を高遠にし希望を博大にし常に進んで止まざるべきのみ、何となれば社會の理想は既往にあらずして未來に存すればなり、然り而して斯の如きの高遠博大なる理想を鼓吹するは豈に保守的なる祖先教もしくは自尊的なる國家教の能くする所ならんや、にあらざるなり、吾人が今に當つて之を論じて世の注意を促さんと欲するもの蓋し故なきにあらざるなり。（明治三十八年）

基督教の特質

近時宗教の研究漸く盛大を致すと共に凡ての宗教に共通なる教義若しくは心理的現象の發見せられたること少からざるは疑を容れざる所にして、一見したる所氷炭相容れざるが如きものも其根本に於て

は何ぞ圖らん符節を合するが如きもの少からず其相違せるものは單に名目の事に過ぎざるを見出すことなきに非ず、蓋し比較宗教學の進歩に依て人類同胞の事實が一層證明せられたるは此研究より來る大なる賜なり。

然りと雖も諸教共通の眞理を敬重するの餘り各教固有の教義を忘れ其特質を沒却し去らんとするは誤謬の甚しきものとす、人或は曰く宗教は皆同一のみ其異なるは只外形と名稱とのみ、或は曰く何の宗教か善を勸めざる又た惡を懲さゞるものやある宗教何の擇ぶ所あらんや、何の宗教にもせよ、人は其信ずる所に任すれば可なり、人に對して自己の信仰を强ふるが如きは愚の甚しきものなりと、是れ皆宗教の特性を究めざるの淺見にして人を過るの最も甚しきものと謂はざるべからず。

近頃米國紐育にクリシナ、ソマジなる一協會あり印度教の根本的教義を記述したる一冊子を公けにし題して慈愛の主スレー、クリシナと云ふ同國宗教雜誌界に鋒々の聲譽あるアウトルック記者即ち此書の梗概を叙して紹介の勞を取り、印度教の根本教義と基督教の教旨を比較照量し、以て基督教の特質を論じ其理想及び歸趣の全然相反對せるを述べたり、論旨明晰にして吾らの同感に堪へざる所なり。

記者即ち書中の論旨を概括して波羅門教の五大教義を擧げて云く第一人生の正統必然なる目的は幸福なり、第二幸福の秘訣は靜寂なり災禍の秘訣は活動なり、第三靜寂の黃金時代は過去に存したるを以て人類の歷史は全く墮落の歷史なり、第四個人的性格の成功とは活動を避け情慾を殺して靜寂の生活を送ることにあり、第五完全圓滿に達するの途は自己以外の凡ての物を忘却して專ら思想を自己に集中し眞

想の生活をなすにありと。

而して記者は基督教が以上各個の項目に於て波羅門教の正反對なることを論ぜり、試みに其要を摘記せん。

(一)基督教の吾等に求むべく命ずるものは幸福にあらずして品性なり「爾曹先づ神の國と其義を求めよ」とはキリストの命令にあらずや、イエス自ら人の爲めに盡して其弟子も亦然かあるべきを命じたり「爾曹の中首たらんと欲ふ者は爾曹の僕となるべし此の如く人の子の來るも人を役ふ爲めにはあらず反つて人に役はれ又多くの人に代つて生命を與へ其贖とならん爲めなり」彼は自ら十字架を負ふて其弟子等の彼に倣ふべきを求めたり、故にパロウも亦云へらく「患難にも歡喜をなせり蓋し患難は忍耐を生じ忍耐は練達を生じ練達は希望を生じ希望は耻を來らせざるを知る」と蓋

し基督の徒が自己の爲にも人の爲にも願ふ所の者は幸福にあらずして完全の品性に外ならざればなり。

(二)然れば休息は人生の終極にあらざるなり、生命は生命を以て終極となす、波羅門教が最大の罪惡にして凡ての災害の母となせる活動は基督教が見て以て最大の善、凡ての祝福の母となせるものなり、勵精、熱切、向上して止まるを知らざるは基督教徒の理想なり休息は方便なり生命は目的なり、休息は暫時的なり生命は永久なり、イエス曰く「我來るは彼等をして生命を得せしめ且つ豐富に之を有たしめんためなり」と。

(三)是故に基督教の黄金時代、完全の社會は過去にあらずして未來に存す、猶太教の豫言者は其人民に向つて將來を望むべきを教へたり、新約時代の豫言者も亦然り「新しきエルサレム」は天より降り

て人の間に來るべしと、之に達するは不斷の進歩あるのみ、彼の先祖が墮落したることを固守せる神學說と雖も未だ曾てエデンの樂園をば人生の理想鄕となしたるを聞かず、基督敎の歷史は發達の歷史なり其終極は神の國にして神の聖旨の天に行はるゝが如く行はるゝ所なり。

(四)是故に品性の善惡を分つは行爲にして冥想に非ず、「其果に依て知るべし」とは即ちイエスの標準なりき、人は其位階若しくは職業に依て量らるべきものにあらず只其職業を爲すの精神如何に依るとは是れ基督敎の精神なりとす。

(五)完全に達するの方法は自己以外を忘れて專心自己を瞑想するに存せずして反つて全く之に反す、即ち他人の爲めに自己を忘却するに在るなり、基督敎に依れば神は思想にあらずして愛なり、「愛

とは奉仕なり、生命は自己の瞑想にあらずして愛に存す、愛とは他を思ふことなり、神と合體するの秘訣は神に於ての瞑想に耽るの生活に存するにあらず、イエスは曰く「我誡を有ちて之を守る者は即ち我を愛するなり我を愛する者は我父に愛せらる我も亦これを愛して彼に自己を示はすべし」と又曰く「わが爾曹を愛する如く爾曹互に相愛すべし」と之を要するに人生の高貴なる希望は幸福にあらずして品性なり、人生の目的は休息にあらずして活動なり理想の世界は過去にあらずして未來に之を追求すべし、品性の高下は其地位にあらずして精神に存す完全に達するの方便は冥想にあらずして他に奉仕するの實行に存す。

以上アウトルック記者の所論は吾らの全然同意する所たるは勿論論じ得て瞭然復た殆んど筆を加ふべきなし、吾らは今俄に印度敎と基

督教の優劣正邪を判定せんとするに非ず、然かも兩教の特質長所を相對照し讀者の一考を促さんと欲す、若し夫れ兩教が東西洋に於て各々其實際社會に及ぼしたる影響を見るに至ては宗教撰擇の忽がせにすべからざるや復た吾らの多言を要せずして明白ならん。

基督教の日本に於ける使命

（明治四十年十月大坂公會堂にて演說）

基督教が日本に傳來してから已に四十餘年の歲月を閱しましたが此四十年間は申すまでもなく我日本に於て大變動の起つた時期であります、其變動中我邦の社會が基督教に對する態度の如きは最も驚くべき變化の一であると申すべきであります、明治十四年頃の事を回

顧しまして之を今日の有樣に對照して見ます時は、何ふしても同じ國同じ社會とは思はれないほどの變化を來して居ります、當時に於ては彼の切支丹邪宗門の儀は禁止候事と云ふ思想が未だ人心に浸みわたつて居つて基督教は我國に有害な教であると、一般に信じられて居りました、處が明治十六七年頃よりは歐米心醉熱が段々盛になりまして西洋の物なれば何でも宜しいと云ふ考から、其西洋の宗教たる基督教も亦た一時大流行の姿となつたのであります、然るに間もなく保守的の反動が起つて來て、國粹保存の議論が勢力を占めるやうになつたので、我國體と基督教とは兩々相容れざるものであると云ふ議論が盛に唱へられたのであります、併し斯かる保守的思想は何時の間にか其影を收めまして、今日となつては左樣の考を抱く者が誰れ一人なからうと思ひの外、どう云ふ勘違へをせられたものか、近頃加藤弘之博士は同

一樣な議論を公にせられました、多分加藤博士は二十年前の時勢と今日とを取り違へて居らるゝのでありませう。學者と云ふものは兎角專門以外の事には疎いものと見へます。併し今日はかゝる議論に傾聽する者が一向少いのを見ても如何に時勢が進歩したかを知ることが出來ます。

去りながら兎角世間には、宗敎などは何でもよい、自分一身の安心立命を得さへすれば何んな宗敎を信じても少しも搆はないと唱道して居る人々が澤山ある樣に見受けられますが、此時に當つて流石に加藤博士は學者であります、基督敎と日本の國家との關係を熱心に研究せられて、假令間違ひながらも大膽に其所信を發表せられ、且つ熱心に之に對する批評を求められて居ると云ふ事は誠に感心な事であります彼の一宗敎が國家に對する影響如何と云ふ問題を講究することを爲さ

ずして凡ての宗敎を十把一束に考へ去る論者の如きは啻に國家に對して不忠の臣たるのみならず、實に眞理に不忠なる者と云はねばなりません、元來宗敎ほど一國の風俗、習慣乃至國民の精神に大なる影響を及ぼすものはありません。一國民が保守に傾くも進取に趨くも國家が盛運に向ふも衰退に陷るも皆な是れ其國の宗敎に大なる關係を有して居るものでありまして、今日世界の地圖を披いて觀る時は歷々として之れが實証を認めることが出來ます、例へば一億七千萬の婆羅門敎徒を有つて居る印度や、回々敎を信じて居る土耳其や、儒敎によつて支配せられて居る支那、朝鮮の現狀を以て之を基督敎國たる歐米の諸强國と比較して見るならば其强弱、盛衰の原因は種々なるものがあるにしても少くとも之が原因の大部分は其國の宗敎如何に在るといふことを認めざるを得ないと存じます。虛心平氣に今日世界の大勢を觀察して

何が果して斯くの如き變化を來せしやを研究する者に取つて、之れが宗教の如何を考察するの必要あるとは私の喋々を俟たざる所であります。

固より一己人の安心立命は最も大切な事柄でありますが、併し吾々が基督教を信ずるのは決して自分一己の安心の爲め計りではありませぬ。基督教が我日本の國家に對して寄與する所の如何に大なるかを認めて之を宣傳するのである。今日日本の社會に於て吾々が最必要なりと感ずる所のものが三つあります。今少しく之を述べませう。

第一は個人の價値に關する思想であります。

儒教は階級主義を以て服從の義務を教ふるに最も意を注いだ者であります。是れは確かに儒教の道德の長所であつて、又短所であります、君臣父子の間に存する忠孝の美德は之によつて充分に養成せられま

したけれども、此等の關係を離れて人間を一人々々として考ふるとは少しもなく、從つて個人の價値と其人格の尊嚴とは全く閑却せられたのであります、印度の宗教たる婆羅門教も亦た純然たる階級主義の教であつて、嚴格なる階級制度を以て絶對の服從を要求するものであります。之と正反對に佛教は飽まで四民平等一視同仁の宗教であります が。汎神教の悲しさには一切衆生を見ると恰かも大海の一滴の如く其間に何等の個人的價値を認めることがない結果として、運命論となり又は厭世主義となり以て今日印度の衰運を來すに至つたものと云はねばなりません。

然るに基督教は如何と云ふに、一個人の價値を重視せること世上何れの宗教も之に及ぶものはありませぬ。世界の人類は悉く皆な天父の愛子にして、個人は永遠不窮なる貴き靈魂を有す、天父の前には自主も

奴隷も皆な同胞兄弟にして、人間は單に人間として全世界にも易へ難き價値ある精神を有するものである。基督の謂ゆる「人全世界を得ると も其生命を喪はゞ何の益あらんや」とは即ち此眞理を宣傳し給へるものにて、此永生不朽の靈魂を有する人格の尊嚴と云ふ思想から今日の歐米諸國に於ける個人の權利と云ふ思想が發達したのであります今日我が國民をして根本的に自治獨立の國民たらしめんと欲せば、此個人の價値と云ふ大眞理を今一層普及せしめなければならぬと思ひます、基督教の日本に於ける使命の一は慥かに此點に存するとを疑ふとが出來ませぬ。

第二は家庭の神聖と云ふ事であります。

近世印度の宗教改革家中に於て最も有名なる彼チエンデル、センは英國に漫遊して到る處に同國の批評を試み、忌憚なく其弊害を指摘い

たしましたが、其演說中左の一句があります、曰く。

予が英國に來りて幾多の缺點を發見したる中に於て只一つ感歎措く能はざる點はクリスチヤン、ホームの如何にも神聖にして幸福に滿てる一事なり、云々。

實にチエンデル、センの言の如く今日歐米の文明には多くの指摘すべき缺點が存する。さりながら何人も羨慕に堪へざる點は彼の國のホームの飽まで美しく飽まで神聖なる一事である。國民的偉大の根柢は慥に此處に存するのではありますまいか抑も家庭とは何ぞや。立派なる邸宅にもあらず美衣美食にもあらず子孫長久にもあらず、幸福なる家庭は實に一夫一婦の根本主義に立つにあらざれば決して實現せられませぬ。夫婦の關係は神聖なるものなりとの觀念が其基本でなからねばなりませぬ。從つて子女は是れ神より托せられたるものとして之

を保證し之を敎育せねばならぬ。古人も國を治むる先づ其家を齊ふと申して居りますが、實に家庭なき國家は決して永久に榮ゆるとは出來ませぬ。而してかゝる神聖なる家庭は一夫一婦の主義の上に立てる宗敎を離れて決して作るとが出來ないとを斷言します。基督敎の倫理は此の夫婦の關係を最も重視したるものであつて、神を基本とした神聖なる夫婦の關係の上に家庭を打ち立つるのが、此敎の人類に齎らした一大使命であります。此點に於て基督敎が我日本國民の上に有する使命は實に重大なるものであると信じます。

第三は人類同胞てふ思想の扶植であります。

今や世界の物質的文明の賜として地球の廣さは日に月に減縮せられて居る、交通の機關は益々開けて世界の市場は益々接近し來り、倫敎紐育の物價は忽ちにして我國の市場に影響を及ぼしつゝある、而して

思想上に於て其最も然るを見る、即ち世界の人類は同胞兄弟なりと云ふ觀念が益々强くなつて來た今日に於ては我々の宗敎も亦も國民的範圍を超越したる世界的宗敎を採用せねばならぬと考へる、苟くも眞理であるならば國の內外を問はず人種の如何を論せず、人類一般の爲めに有益なる宗敎を採つて之を我が宗敎とする寬宏なる度量を抱かねばならぬ。膨脹的國民には特に此の覺悟が必要である。若も日本の國家にのみ適したる民族的の宗敎であるならば之を以て他國民を敎化するとは出來ませぬ。今日以後の我國の宗敎は此人類的觀念即ちSense of Humanityを最も能く發揮する所のものでなければならぬと思ふ。而して基督敎は實に此偉大なる信念の上に打ち立てられたる宗敎であつて、將來我邦が世界に於ける大國民として立たんと欲せば、是非とも此の大信念を國民一般に確立せしむる所の宗敎によつて人類的觀念

を一層切に養成し行く必要があると信ずるのである。區々たる民族的宗教は決して我國民をして偉大ならしむる所以の道でないと考へます。基督教の日本に於ける第三の使命は實に此點に存するではありますまいか。

以上述ぶる所は神儒佛の諸教に由ても幾分か教へられた點がないではありませんが、而かも甚だ不完全なものであります。個人の價値といひ、家庭の神聖といひ人類的思想といひ、日本固來の宗教に於ては未だ甚だ不充分なるを免れませぬ。如何に公平に考へましても、私は此等の點に於て基督教ほど有力なる貢献を我日本國民の上に致すべき宗教は無いと信ぜざるを得ませぬ。是れ吾々が斯道を以て我愛する日本國民を教化せんと欲する所以であつて、日本臣民の一人として一片愛國の至情又已むことを得ざるの致すところであります。滿堂の諸君よ、か

の宗教は個人の事なれば自分一己の安心立命を得さへすれば可なりなどいふ冷淡なる考を保ち給ふとなく、宗教が國家に對する影響の如何に深大なるものあるかを思ふて、之れが撰擇を誤り給はざらんことを、是れ私の切望に堪ざる所であります。

日本人の性質と基督教—兩者の接觸點及反抗點

（明治三十四年七月神戸女學院に於る米國宣教師會にて演説）

一

人情は萬國同一であるといふは眞理であるが、他の側面より見ればギリシヤ人とユダヤ人とは決して同一ではない、各國民には夫々の特

質があつて夫が外貌を始めとし風俗習慣文字制度等に現はれて居る左れば「すべての人には我そのすべての人の狀に循ひ……いかにもして彼等數人を救はん」(哥前○廿三九)と志す傳道者にとりては其國民の性質を研究するは甚だ肝要なことである。

二

日本國民の特性として記すべきは何であらうか、試みに先づ倫理的方面より觀察したる所を述べんに予は日本人の性質中四個の最も注意すべきものがあると思ふ、之を解せなければ日本人を知ることは出來ない。

(一)義理の念　義理といふ字は日本語の中にて外國語に飜譯の六ケ敷い語の一つであるReasonable,Right,Justice又はIought,獨のSollenなど譯してあるが孰れも不充分である、最も多くの場合に於て義理は人情と

併行しない、日本の小說演劇などで人を感動するのは義理人情の爭を叙したところである。

「あちら立つればこちらが立たずこちら立つればあちらが立たず義理と情にはさまりて泣より外はなかりけり」

と云ふ點が人を泣かしむるのである平の重盛が父淸盛の暴戾を諫止せる一段は有名なる歷史上の一佳話であるが「忠ならんとすれば孝ならず孝ならんとすれば忠ならず重盛進退維れ谷る」といふ所はつまり義理人情の衝突である、併し「大義親を滅す」とある通り義の存するところには父子の關係もないのである、義理の前には何ものをも捧げなければならぬ、勿論己の利害や幸福を省みることを許さない、義理の念には犧牲の精神と任俠の氣象を含んで居る是等の道理の分らぬ者を義理を辨じないものとて賤むるのである。

斯くすればかくなるものとしりながら
止むにやまれぬ大和魂　（松陰）

と歌つたのは義理の念を愛國的に言顯したものと見て差支ない、使徒保羅が「若しわが兄弟わが骨肉の爲にならんには或はキリストより絶れ沈淪に至らんも亦わが願なり（羅九〇三）」と云へるが如き實利主義より打算すれば如何にも解し難いが日本人の性情より見れば決して解し難いことはない、又夫に反對でキリストが「我よりも父母を愛む者は我には協はざる者なり我よりも子女を愛む者は我に協はざる者なりその十字架を任て我に從はざる者も我に協はざる者なり」（馬太十〇三十七八）と宣へるが如きも大義滅親の主義より見れば勿論のことである、キリストの生涯は義理が人情に克ちたる實例である、惡魔の試誘は凡て人情をもつて誘ふたものであるが、キリストは義理を明白にして之に打克ち王ふ

たのである、又最後に「我父よ若しかなはゞ此杯を我より離ち給へ」とあるは人情である「されど我心の從をなさんとするに非ず聖旨に任かせ給へ」と宣ふに至つては義理の念が人情に克つたと解釋した方が日本人には最も解り易いであらう、キリストの十字架は贖罪である神の怒を挽回んが爲めなりなど云へる神學說は余程入り惡いが、獻身犧牲の精神より解釋することは甚だ容易である、下總の佐倉總五郎が其鄕民の爲めに一身を犧牲にし遂に磔刑に處せられたる事蹟に感心せぬ者は一人もないが、是は總五郎の義氣に感じたのである、此點より見れば十字架はギリシキ人には愚かなるものユダヤ人には躓きとなりたれども日本人の義理の念に對しては決して左樣ではないと信じます。

（二）報恩の情　恩を知らぬは畜生であると子供の時に度々敎へられたことを記えて居る、畜類の中でも犬は恩を知つた獸だ猫は恩を知らぬ

ものとして賤めるのである、佛敎では四恩といふて父母の恩、國土の恩衆生の恩、三寶の恩の四大恩義に報するのが人間の務めであると說くのである、此四恩報謝といふ思想は神儒佛三敎共通の敎訓と申しても宜しい、恩を知らぬといふ程惡いことはないと子供の時から腦髓に能く浸み込んだものである、日本人が基督敎に反對した一つの理由は基督敎は君恩父恩等を無視するものと誤解したからである、もし神に對する報恩の敎なることを知らば彼等は歡んで之に來るべき筈である然しながら神を信仰せねば罰があるとか信仰すれば報酬があるとか說くのは極めて薄弱なる動力である、否な却て之に反抗せしむ所以である。

心だに誠の道にかなひなば
祈らずとても神や守らむ

（道實）

と答ふるに違ひがない、が天に謝するのが祈禱の第一で道を行ふは實に天恩に報ずるのであると說く時は一人も合點しないものはない。

貝原益軒（一千六百三十年—一千七百十四年）は其婦人論に就て近年痛く福澤諭吉翁の爲めに毆擊を蒙つたが儒敎の道德思想を平易にして普及したる功績は明治年間福澤氏が文明思想を普及したる功にも劣らない人物で、その益軒十訓、女大學の如きは明治以前の社會に於てはバイブルの如く尊敬されたものである、益軒の書中に左の如き語がある。

人となるものは天地を以て父母とする故、父母の恩を受くるが如く極りなき天地の恩を受けたり、天地のめぐみにて生れたる恩のみならず身を終るまで天地のやしなひをうくる事たとへば人の身の父母より生れて後も父母のやしなひによりて人となるが如

し、こゝを以て此世に生れては常に天地につかえ奉りいかにもして天地の恩にむくいん事を思ふべし是れ天地につかふる孝なり云々。

此言には日本人として恐くは一人も異議あるものはあるまいと思ふ天地とは勿論天地の主なる上帝を指せるものである、素より天父といふ明白なる思想はないけれども人間は天地の子なれば是に事ふるは當然の事なりと說いたのである二百年前の儒者の言が聖書の敎と甚だ似寄つて居るのは注意すべき點てある。

(三)廉潔の性　英語の Coveteousness, greedy, love of money 等に反對の語である、勿論何れの國民でも廉潔の德を稱せぬ者はなからうけれども國民全體として金ばなれの潔白を貴ぶこと日本國民の如きはないと云つても過言ではない、君子は利を語らずなど云つて其極端は遂に金

錢を取扱ふことをさへ賤むる迄に至つた、封建時代には「武士は喰はねど高楊枝」といつて假令へ空腹でも他人の憫憐を乞ふ樣なる振舞を耻ぢた獨り武士のみならず勞働者に至るまでも其氣象は有して居る、日本人と支那人と非常なる相違があるのは此點である、支那人ならば頭の二つ三つ擲られても一錢にても多く貰ふたら宜しいといふ風がある日本人は金を取らんでもこちらから擲らうとする方である、此性質を知らずして日本人に對する時には大なる間違が起る、況して傳道、敎育等に從事する者抔は報酬を語るすら耻づる所である、君の月給は何程と問はるゝやうなことがあらば殆ど侮辱と認めらるゝ位である、日本の傳道師中には從來自分の財產を道のために蕩盡し極小額の報酬に甘んじて遣つた者が少くない、今日でも獨立自給の主義で辛苦を忍び貧乏に安んじて居る者の多いのは矢張廉潔の精神に養はれた御蔭

である、畢竟武士道の感化與りて力ありと考ふ、日本近世の歴史に於て維新の際、廢藩置縣に先だち三百の諸侯が皆な容易に先祖傳來の封土を奉還してしまつたことなどは實に空前の出來事で他國に例のない事であつて日本人の性質を解せざれば分らない、先年米國の一友人を伴ひ早稲田の大隈伯の庭園を見せて貰ふた時、同家の書生が丁寧に案内して呉れた歸りに友人は小額の金をしかもムキダシに其人に渡すと先方では不審に堪えない、自分は氣の毒に思ひ外國では案内者に對して謝金を出す例があるからソンナ積りでショウ日本の禮儀を知らないから御免下されと詫びて取戻し其事情を友人に語ると友人は亦た頗る不審であつた、東西人情の違つた點である、西洋の文明思想に連れて黄金萬能主義が段々跋扈して來るのは痛ましいことである、併し「人は一代名は末代」といふ思想はマダ日本人を支配する大動機である、

數年前熊本の士族で一家擧つて餓死して死んだ者があつた、人の憐みを乞ふを屑しとせず枕を並べて餓えたのである、然るに立派なる具足箱はチヤント床の間に飾つてあつたといふことである「オノル」を重んずるの氣象は惡くすると僞善に流るゝの弊はあるが武士が名譽を重んじた精神は美しいものであつた、之を良く導けば「心の貧き者」「心の清き者」「義の爲めに迫めらるゝ者」の心と決して遠くないと信ずる次第である。

(四)忠孝の德　今、事新らしく申す迄もなく日本人の思想中に非常の權威を有したる言辭である、今や此二字は稍やもすれば形式に流れて其弊害も亦少からず、畢竟之を過重し又は誤用したるの流弊である決して忠孝其ものゝ害ではない、忠義と云ひ孝行と云ひ今日にても日本人最多數民の無上のインスピレーションである、前に掲げたる報恩の

念と最も近いものであるが「君君たらずとも臣臣たらざるべからず」「父父たらずとも子子たらざるべからず」忠と云ひ孝と云ひ我事ふる所に全身を捧げるの心に外ならない、己の爲に生きず上に在るものゝ爲に生きるの精神である、武士は君の馬前に倒るゝを當然の義務とした、我生命は己の有でないといふが武士の覺悟であつた、今武士敎育の一例として鹿兒島の士風に關し曾て太陽（第四卷第一號）に揭げられたものを紹介しよう。

鹿兒島の國風には只死を鴻毛よりも輕くする氣節を養はんことを旨と勉めたりしかば男兒生れて七つ八つ許になれば其父兄又は之に代る人の何事をも云はで唯君父の爲に死ぬか〳〵と問ふ時小兒は恰も神明に誓文するが如く死にます〳〵と答ふるを以て例とすめり中には隼人の薩摩猛雄がもとに心弱き者ありて急

に左樣に受け答へせぬがあり、然る時は父兄は幾回も敎へ諭し打懲してさへも誓はしめきとぞ聞く云々。

今日より見れば野蠻なる風習に見ゆれど宗敎的精神に近いものが武士敎育にあつたことは明である、日清戰爭に日本の兵士が强かつたのは兵器が精良で訓練が行屆いて居たばかりではない、此遺風が兵士にあつたからであるとは諸君の認める所である「我儕のうち己の爲に生き己の爲に死る者なし蓋我儕生くるも主の爲に生き死ぬるも主の爲に死、この故に或は生き或は死るも我儕は皆主のものなり。」（羅十四〇七）と保羅の云ひしが如きは古武士が其主君に對するの覺悟と少しも異ならないと云つても宜しい、精神に二つはない其目的の高下大小があるのみである、基督敎の精神を以て之を發揮するときは神の愛に對するの忠孝の心となり人類の爲に盡すの人情の精神ともなるべし「わ

れ來りて之を廢つるにあらず成就せんが爲めなり」(馬太五〇十七)基督教は是等の諸德を發達し高尙にし其目的を成就するものであると信ず。

三

是まで述たる所に依れば日本人の性質中にて其倫理的方面は基督教に反對せないのみならず寧ろ相接觸する點が多いと申して可なりである、然らば日本人が基督教に反抗するは如何なる點であるかと云ふに夫は智識的及哲學的の方面にありと云はなければならぬ、其重もなるものが三つある夫を極簡單に述べようと思ふ。

(一)日本人は現世的である從つて非超然的である概して云へば日本人の性質には純正哲學は豐饒なる耕地を有しない、日本人の內からアリストートル、プランクリン的の人物は多く生じた、プラトー、カント、ヘ

ゲル的の人は殆ど出來なかつた、佛教は盛に行はれたけれども佛教徒の大人物として現はれたのは日蓮、空海、眞鸞等であつて孰れも經世的の宗教家であつた、彼等の開始した宗派が一番日本人に廣く擴まつて居るのである。華嚴、天台の卓拔幽遠なる宗旨は遂に普及しなかつた、又た儒教の感化によつて「生を知らず焉んぞ死を知らん」的の人世觀が中等以上には最も力を有したのである、同じ儒教の內でも哲學的の傾向ある陽明派よりも實際に近き朱子派の方が遙かに勢力を有したのである、尤も舊來の宗教や習慣の中に多數の迷信のあつたことは申すまでもない怪力亂神を語りし例も多いが、西洋の科學思想が入り來ると共に誠に容易に之を一掃し去つた、それは畢竟日本人本來の性質が現世的であるからと云はなければならぬ、右の如き次第であるから基督教の超自然的分子は之を說くこと甚だ困難である、奇跡は福音の證據

とならずして反つて礙げとなるのである。

(二)日本人は凡神的である、佛教の凡神的なるは申すまでもなく神道も矢張凡神的である、日本人に乏しいのは人格の觀念である天とか道とか眞理とかいふことはあるが人格を具へた天父といふ思想は無い、是れは全く新い思想である、又た基督教的正義罪惡の念が日本人の思想の内には乏しい、反つて目的の爲めには方便を擇ばないといふ主義が勝を占めて居る、日本人の弱點たる男女間の節操の嚴格ならぬのも矢張同一の原因から起たのであらう、曾て英人バーヂット氏が日本の文學には詩の第五十一篇が缺けて居ると云つたのは如何にもその通りである、斯の如き凡神的の傾向は基督教の或る教義を解するには便益を與ふるに相異ないが又た妨害となることも少からぬ、基督教的有神說を充分に布殖するには其根本から築造せなければならぬ。

(三)現世的で凡神的である結果として日本人の思想には運命說が强大なる勢力を有して居る、是が日本人が向ふ見ずに或る場合に非常に勇敢なる代りに又忽ち冷へ易き所以である、全體日本人はシツコイものを厭ふ美術品の彩色でも濃厚なるを好まない食物も淡白を喜ぶといふ質である。

しきしまの大和心を人とはば
朝日に匂ふ山櫻哉　(宣長)

●是れは美い所で又た大なる欠點である所謂、仕方がないとて諦めることが多い、敵と爭ふても又忽ち和解することが出來るが、その代りに正義のために爭ふて飽までヤルと云ふ方は不長所である、此故に「己を捨てるとはあるが「己を守りて」死に至る迄忠信に、否永遠の生命を望むといふ大希望に至りては基督教より受けなくてはならぬ點であらう

と思ふ。

四

以上列擧したる日本人の性質を形造くるに至りし原因を詳論することは敢て試みない積りであるが神儒佛の三敎の勢力は云はずも知れたこと、社會組織も亦與りて力があつたであらうが、日本の風土景色も亦此性質を養ふことに大なる關係があつたと信ずるのである、要するに右の如き次第であるから日本人の性質の倫理的方面は基督敎を歡迎するのである之に反し其智識的方面には基督敎を說くに少からぬ障礙が横はつて居る、予は基督の福音は日本人を救ふ「神の大能」なることを疑はない「他の邦人の中に在る如く」日本人の「中よりも果を得ん」ことを信ずるものであるが其果は必しも「他の邦人」と同一であらうとは思はぬ、同一であるべき筈でないと信ずる、歎ずべきは前に列擧した

る義理、廉潔等の美德が物質的文明と共に大に衰微したことである、之を誘導して新生命を與ふるのは基督の福音である、一層高尙雄大なる倫理的觀念をもて古來の倫理的觀念を成就するのみならず神と宇宙の關係を明白にして有心的の天父を紹介し個人的意識を開發して責任の念を確固たらしめ其品性を訓練して堅牢雄大なる人格を養ふが如きは基督敎が日本國民に寄與すべき使命であらうと信ずる。

印度人に贈るの書

印度にある我敬愛する淑女紳士諸君に謹んで一書を呈す。

曩日予が印度青年會同盟の懇待に依り元田博士と共に貴國各地を回遊せるや到る處熱誠懇倒なる歡待を蒙りしは感謝措く能はざる所

殊に諸君が人種宗教上の異同を意とせずして予輩を遇する恰も同胞に於けるが如くなりしは深く予の感銘する所なり若し夫れ不完全の英語を以てせる講演を靜聽せられ時に大膽露骨なる忠言を呈するも未だ曾て寸毫の慊焉の情を露はさざりし寛容の態度に至ては眞に敬服措く能はざりし所なり、予は貴國に於ける六旬の旅行を回想する毎に神興、喜悅、感謝の念交々湧起するを禁ずる能はず、夫の驚くべき廣大なる邦土と全地上の五分の一の人口を有し諸國に超絶せる三千年古の文明を有し世界の最峻峰と絶美の建築を有し高遠深奥なる宗教を生じ幾多の偉人天才を生じたる印度は予の爲に限りなきの神興たらざるを得ざりき、其多趣味にして豐富なる天然と、紛然雜然として而も意味深き長久の歴史を有せる風俗舊慣は豈に旅客の爲に無限の興味を感せしめざらむや、況んや諸君と吾人とは共に東洋に屬し一千數百

年來相交通し或る程度まで同一の思想慣行に養成せられたるに於てをや、然り予等の貴國にあるや貴國人に接觸して其傾向嗜好等を知るの深きを加ふるに從ひ予輩は精神的血管が印度人なる諸君と日本人なる吾人の間に共通せることを感せずして止む能はざりき、思ふに諸君に同情し諸君の精神を了解するに於て泰西諸國民に勝るものあらんと信ぜざるを得ず、諸君が旅人たる予輩を遇する同胞啻ならざるの懇情を以てせられたる所以のもの亦豈に此共通の性情之をして然らしめしにあらざるなきを得んや。

予輩が貴邦を巡訪したる目的は諸君と思想を交換し意見を語らひ交情を溫め相提携して東洋覺醒の途を講ぜんとするにありき、予輩の旅行は單に予輩の所信を告げん爲にあらざりき復た大に自己の知見を開き自國民發展の爲に資するところあらんことを期したり、是れ予

輩が屢ば諸君に告白したる所なり、予輩は自ら得る所の少からざりしを謝すると共に予輩が諸君に寄與したりしものが極めて漠然として薄弱なりしならむを恐る、予輩の不敏なる其使命を果すに於て頗る不充分なりしは慚愧に堪へざる所なり、予輩の目的は基督教宣傳の爲めに非ざりき、是れ諸君の能く知る所なり、然れども予輩が基督信徒たることも亦諸君の始めより認知せられし所なり、予輩は信仰の緣由を問ふ人に對し之を答ふるに躊躇する者に非ず、然れども予輩の講演の最重の目的は基督教辯護の爲めにあらずして唯た公平に誠實に日本社會近時の變遷を叙述し且つ其所因に就て予輩の所信を忌憚なく表白するにありき、予輩の所信に依れば我邦近時の激變と其功果とは專ら東洋文明の自然的開發に非ず又獨り泰西の物質的文明の輸入に依るにもあらず、泰西文明の根本思想と日本固有の精神とが相融化して茲

に新興國民の性魂を生じたるに依る、即ち立憲政治の新設、普通教育の完成、新法律の制度、婦人の地位の上進、赤十字社を始め無數の慈善博愛事業の興起等に依て我大和民族は古來未だ曾て有せざる新文明を開發したるものなりと云はざるべからず、科學的機械工業の輸入が日本の新文明を補益せしことの莫大なるは誰か之を否定するものあらむや、軍制の改革と軍器の改善が日本を今日の地位に進むるの大要素たりしも亦予輩の否定する所にあらず、然れども之を以て日本の今日あるの所以の理由を全く解釋し得たりと思量する者の如きは眞相を誤るの甚しき者なり、泰西人が日本人を見て西洋人の眞似する猿猴なりと冷評したるが如きは偶ま其淺見を自白したるに過ぎず、模擬、踏襲豈に大國民を造くるの要素ならんや、日本國民は其精神上に於て泰西文明の根本思想を消化せんと欲するなり。

然り而して予輩の所謂泰西思想の淵原を尋ぬれば美術と哲學を傳へたる光榮を希臘人に歸し、法律制度の先進を羅馬人に讓るが如く宗教思想と倫理觀念の泉源とは之をユダヤ人に求めざるを得ざるなり、而して宗教的生命の醇の醇なる者に遡れば遂に之を耶蘇基督の教訓と其生涯の感化に歸せざるべからず、泰西文明を稱して基督的文明といふ豈に不可ならんや、日本は實に「科學と普通教育と個人平等の權利の如き泰西文明の根本的概念を忠實に受納して以て基督教國の純正なる一部となれり」（ギユリキ博士著日本人の進化十四ページ）と云ふは決して過當の言にあらず、斯て日本近時の變化は彼の人類を東西洋に二分し其人種に依て文明の種類を類別し彼我到底相融化すべからずと考へし哲學者の謬見を打破して餘りあり、但し予輩が日本今日の文明を指して基督教に負ふ所ありと云ふは外國宣教師等の功に依れりとの意にあらず、亦た

泰西基督教會の賜なりと云ふにもあらず、凡そ開國以來教育、文學、法律宗教等百般の事物を通じて傳はりし泰西の近世思想に負ふところ最も大なりとの意なり、恐らくは我が邦人中予の斷定に就て異論を挾む者蓋し少からざらん、然かも公平に日本近時の進歩を研究する者は必らず此間に於ける基督教思想の一大勢力を看過すること能はざるべし（中略）

予輩は泰西文明の我邦に於ける感化力を謳歌するに於て毫も恥づべき理由を見ず、何となれば眞理は一國民の私産にあらず文明は一人種の固有にあらざればなり、況んや地理上より云へば基督教の淵源は東洋にありて西洋に存せざるに於てをや、吾人は一千五百年の往時諸君の祖先より傳はりし佛教を納れ以て今日に至れり、我國民が此宗教に負ふ所の廣大なるは喋々を待たざるなり、我文明が佛教と共に貴邦

より傳はりし學問、美術、工藝等に負ふことの甚だ深大なるは吾人の喜んで承認する所なり、予輩は之を思ふ毎に印度人士に向つて感恩の念禁ずる能はざるものあり、然ども佛教の貴邦を去て我邦に入り日本人の靈的胃囊に消化せらるゝや已に印度教にあらずして日本教なり、その文明は印度的文明にあらずして大和民族の精華となれり、吾人が今日の泰西文明に於けるも亦之と異ならず、予輩は所謂西洋の思想が白哲人の專有たるべき理由を發見すると能はざるなり。

我國王政維新に際し明治年間唯一の皇帝にして國民に無限の敬愛を享けさせ給ふ我皇帝陛下は、天地神明に誓つて宣はく「舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし」「智識を世界に求め大に皇基を振起すべし」と、是れ我同胞が三十年來忠實に遵奉せんと務めたる國家的方針の主要なるものなり若し我國近時の絶類無比なる急進的發展に何等かの

秘訣ありとせば、一言にて盡すべし、陛下の勅語に宣示せられたるが如き開豁公明なる心胸に存すと言ふを得べし、是れ陛下を始め新時代の諸先輩等が卒先して主唱し且實踐したる所なり、予は個人とし基督教を信ずるの他の幾多の理由を有すると共に、此宗教が我國家的生命たらざるべからずとの信念を忘るゝこと能はず、我が國家は天地の公道に據らずして確立すること能はず、基督教は即ち予輩が天地の公道を發揮したる最高の宗教なりと信ずるものなり、予が自ら基督教徒たるは陛下の御誓文の主旨を遵奉するの精神と毫も相悖らざるなり、然れば日本の基督教徒はキリストの忠僕たると同時に陛下の良民、日本國の愛國者たり得べしと確信するものなり。

予輩は貴國政治上の現時の境遇に對して深く同情を催さゞるを得ず、予は貴國民が獨立自治の國民として東洋に嚮起するの日あらむこ

とを希望して止まざるものなり、然れども貴國民の救は單に政治的改革に依て期待せらるべしと云ふ者あらば、予輩は未だ容易に附和雷同すると能はず、予輩は諸君が寧ろ先づ其根本に遡り精神的開發と社會的改善に力を致さんとを最急の要務なりと信ず、先づ教育を普及して科學的思想を擴め、階級制度を廢し人類平等の權利を重んじ、新思想を入れ以て陋俗を打破し、夫婦の倫理を正し以て家庭を改善し、民衆の幸福を增進せんとを務めよ、斯くて鄉黨相信じ貴賤相輔け以て徐ろに國民の統一を期せよ、是れ印度振作の唯一法にあらずや。

卒直に之を云へば予は貴邦を見て印度人士の間に所ける迷信の旺盛なるに喫驚せざるを得ざりき、是予が曾て耳にせしところ想像せしところに幾層倍したるものなりき、惟ふに斯る迷信の因て來るところには深き理由なくんばあらず、而して其多くが既往に於て多少の功用

ありしことをも否定すべきにあらず、然れども輓近智識の普及、科學の進歩に鑑みて之を見れば貴邦に於ける多數の宗教的儀式と人種的慣行とは迷信の甚しきものにして、貴國現今の最大災厄なりと斷言するも誰か之を過言なりと云はんや、諸君の如き修養あり教育ある紳士淑女の多數は夙に此事を知了せらるゝならん、社會改良の聲は之を耳にせざるにあらざるも、微々として全國に響應するに足らず、奮然起て正義の爲めに奮鬪し一身の榮辱を顧みざるの志士仁人に至りては眞に曉星の寥々たるが如き感あり、然れども予輩は漫りに迷信を打破せよと奬むるものにあらず、迷信を排斥する敢て難しとせず、而かも之に代ふるに、より高く、より清き信念を以てするにあらざれば偶ま其人の後の患狀は前よりも更に惡しかるべきに至らむ、迷信を救治せんとする者は清高雄大なる信念を皷吹して人間の至情を滿足すべき或ものを

與ふることなかるべからず。

之を我邦近時の變動に鑑みるに、明治の初年泰西の物質的進歩と其風俗を移植するに急にして、專ら舊慣古俗を破壞することに務めし結果、神、儒、佛の三敎は頓に其威嚴を墜し而して別に之に代ふるの新福音を得ず、人心適從する所を失ひけるが幾何もなく反動の機運到來し、保守的傾向勃如として頭を擡げ、一旦破壞せられたる種々の習慣の復活せしもの其數を知らず、而かも泰西の新思想に敎育せられし青年等は舊信仰に復歸することをも得せずして彷徨せしが、實業熱の隆盛と物質的快樂の增進も遂に彼等を滿足せしむるに足らず、近年に至りては煩悶の聲頻りに聞え一方に放縱に墮落する者あれば同時に他方に熱切なる求道の精神未曾有の熾盛を見るに至りぬ、彼の新佛敎、新福音、新預言者等の續起するも亦人心が不安の狀體にあるを徵めすにあらざ

るはなし、日本青年の間に求道的精神の熱烈なる今日の如きは未だ曾て有らざるなり、予は彼等の凡てが基督敎の研究者なりと云ふにあらず、或は新佛敎に心を寄する者あり、禪道に賴りて安心を此所に求めんと試むる者あり、然れども基督の人格を追慕し聖書を研究しつゝある多望なる青年が甚だ多數なるを見て欣喜措く能はざるなり。

敬愛する諸君よ諸君の祖先はウイダ、ウパニシャッド、ツリピタカ等の幽邃なる宗敎哲學を世界に與へたり、釋迦よりラモーフン、ローイに至るまで多數の宗敎改革家を生めり、その哲理の高遠にして思想の博大なる全世界の學者が印度人士に就て嘆稱措く能はざる所なり、殊に諸君が冥想に長じ超然として想像界に逍遙し高く深く信念を修養するの一事に於て誰か敬意を表せざるものあらんや、現今の泰西宗敎家が餘りに活動を高調し、現在を救濟せんとするに急なるの餘り、靜寂な

る宗教生活を忘却するの傾きあるが如きは、未だ宗教の圓滿なる發展とは云ふべからず、予輩は印度人士が將來宗教の發達上その神秘的方面に寄與することの少なからざるを信ず。

然れども凡そ長所のあるところは又たやがて短所の存する所なり個人に於て然り國民に於ても亦然り、諸君の宗教に於けるや專ら冥想に耽りて活動的方面を閑却し去れるにあらざるか、夫れ宗教は哲學にあらず倫理にあらず儀文にあらず習慣にあらず、宗教は生命なり、能力なり、小にしては個人の生命となり大にして社會進歩の活力たらざるべからず、傳道と云ひ慈善と云ひ矯風といふ是れ皆宗教的生命の發動にあらずや、宗教家が世の光となり地の鹽となり得る所以の者實に此に存す、それキリストは祈禱の人なりき、靜寂を愛せし人なりしが、社會に出でゝは罪人、娼婦をも友として彼等を見ること兄弟姉妹の如く、

々天父の慈愛を說きて倦むことなく、遂に十字架上犧牲の最後を遂ぐるに至りぬ、至愛燃ゆるが如き彼の人格に接し、其無限の感化に浴する者孰れか徒らに空想に流れて一生を閑過するとを得んや「キリストの愛我を勵ませり」と、パウロの絶叫したるは蓋し基督教徒共通の實驗なりとす、基督教が社會改善の動機たる所以の秘訣は茲にあり、吾人は此至大至高の一大人格を亞細亞より失へり、東洋今日の最大急務は東洋のキリストを其至當の位置に回復するにあらずや。

論じて茲に至れば諸君は予が口吻の甚だ宣教師に似たるものあるを怪まるゝならん、乞ふ暫く予をして言はんとする所を了へしめよ、予の所謂キリストは泰西教會のドクマに非ず、其哲理に非ず、信仰條目にあらず、儀式にあらず、素より英米の風俗習慣にあらざるなり、基督の人格は宗教的生命の最高顯現にしてその教訓は普及の眞理なり、ドクマ

は古今相同じからず、儀禮豈に東西同型なるを得んや、風俗習慣何ぞ必ずしも皆泰西に則るの必要あらんや、キリストは國土以上にして時世に超越せり、予が諸君に勸めてキリストを容れよと云ふ所以のものは古今東西を貫通せる眞理と之を其人格に體現したるキリストをよく納れと云ふに過ぎず、バルロース講演の講師ホール博士云へらく。

「西洋の基督教は純潔なるキリストの信仰の精髓を發揮したる者としては不充分、不完全たるを免れず、故にキリストの力が國民を救ひ且つ之を潔め得べき實例として東洋に示めすには足らざるなり、西洋の有せる道義的强力と社會的清潔と靈性的能力とは皆キリスト、イエスの賜なりと雖も、惡は善と混し暗黑は光明と雜れるなり、今や東洋の有識なる人士が切實に基督教と世界將來の關係を考慮せるに當り東洋達眼の士は我等西洋人を見ずして直ちにキリストを見ざるべからず

……若し夫れ西洋の活力と東洋の達識とが同心一致してイエスキリストの信仰を解釋し實行するの日あらば始めて神の無上の賜(イエス)を了解し敬重し且つ之を地上に發揮することを得べきなり」と。

予の切に祈る所は實に斯る日の實現せられんとなり、予はブライアン氏と共に左の如く告白するの已む能はざるを覺ゆ、「今我等は東洋に欠乏せる最も重要のものに及ばざるべからず即ち各個の生涯は神に對し個人的責任を負へることゝ人類の兄弟なることを敎へ、且つ人生の偉大なるは人に事ふことなるを敎ふる的の人生觀是れなり、第一は受造者と造物主との合理的關係を確立し、第二は人類相互の正義の基礎を据ゑ、第三は尊貴なる勤勉を以て各生涯を充實するに足るべき希望を供給す」と是れ即ち基督敎の精髓を最も簡明に言明せるものなり、福音宣傳の目的豈に他意あらんや。

予をして露骨に予の所感を語ることを許さば、予は將に云はんとす、諸君は宗教の精髄に着目せずして其枝葉を重んずるに過ぎたり、是故に自己の所信以外の宗教に對すれば忽ち之に附隨せる儀式、習慣、神學を見て取るに足らずと判定せるにあらずや、諸君の宗教を見るや餘りに哲理を重んずるに傾けり、是れ單純なる基督の教訓中に生命を探り得ずして反つて淺薄なりとして之を排斥せる所以にあらずや、諸君が自らの宗教を尊敬するの念や至れり盡せり、之を人事の百般に應用せざれば滿足せざらんとす、然れども之を尊ぶの餘り古來の夥しき習慣をば直ちに宗教其ものと同一視するに至れり、是れ諸君の宗教生活に進歩と生命を認め得ざる所以にあらずや、今の印度の狀態何ぞ能く往時キリストの代のユダヤに酷似するの甚だしきや諸君が古人の傳說を敬重し儀禮に熱信なる猶太人にも劣らざるなり、而かも彼等の如く

「律法の最も重き義と仁と信とを廢る」ことはなきや、諸君は又たナザレより何の良き者出でんやと斷定したる所謂神の選民に倣はんとすることはなき乎、予の所言もし露骨に失せば乞ふ之を恕せよ、予の茲に及べるもの畢竟貴國民の休戚と前途を思ふに切なればなり、予は貴國にありて予と同じくキリストの徒たる諸君に告げん、予が印度に在るの日基督教徒諸氏が改信と同時に忽ち印度人の社會と遠かり外國人の如き態度を執れりとの批難を耳にしたることあり、是れ或は未信徒の誤解ならんも知るべからず、然れども信仰の爲めに忽ち四方の擯斥を蒙り、窘迫交々至るの場合に於て、諸君の或ものがかゝる態度に陷るは實に止むを得ざるものあらんことを思ふ、然れども諸君の改信は諸君をして非印度人たらしむることあるべからず、諸君が祖先を敬し同胞を愛するの熱情を冷却すべきにあらず、諸君がキリストを信ずるの信仰

は諸君をしてます〳〵其郷土と同胞の爲めに力を盡さしむる熱情とならざるべからず、此心諸君にあらんか諸君は改信のために其隣人と遠ざかること勿れ、反つて及ぶ丈け其日常の行爲を、彼等と共にせんことを務めよ、鹽は接觸せざれば其味を傳ふること能はざればなり、賢明なる印度人士は必らずしも文字の福音書を手にせずとも、諸君の人格に顯現せるキリストの福音を讀まざるを得ざらむ、諸君は實に印度人士の爲めにキリストの生ける書翰なり。

敬愛する諸君よ、東洋人として予が諸君に對する同情の念と憂きに予に與へられたる厚遇に對する無限感謝の念は予を驅りて予が豫期せし處よりも多く語らざるを得ざるに至らしめたり、予の文章は拙にして語句は完備せず、予は紙上に於て予が意を盡くす能はざるを憾む、之を要するに諸君は光榮ある過去を有せり、數千年來の修養を積り、然

れども諸君の未來は過去よりも大ならざるべからず、夫れ神の國は、過ぎ去りしものにあらずして未だ來らざるなり、否な今や日に近づきつゝあり、神の國は一人種、數國民の特權にあらず、多くの人々東より西より來りて……天國に坐せん、我等は各自特有の性情を發揮して以て人類至當の發展に獻與する所のものなかるべからず、是れ即ち神の國を地上に來たす所以なり、諸君希くは幸に坦懷虛心、公明正大の心事に照して宜しく諸君の就くべきものを撰び、一身一家一國の福祉を完うし玉はんことを、切に祈望して已まざるなり、大印度の未來をして、より大なる印度たらしめよ、予は重ねて諸君の慇懃なる厚情を謝し切に諸君の清福を神に祈り、謹んで敬意を表す。

明治三十九年十月

諸君の忠僕　原田助

信仰と理想 終

明治四十二年十二月十六日印刷
明治四十二年十二月十三日發行

信仰と理想奥付
○定價六十錢

著者 原田助

東京市京橋區尾張町二丁目十五番地
發行者 福永文之助

東京市京橋區日吉町四番地
印刷人 渡邊爲藏

東京市京橋區日吉町十番地
印刷所 民友社印刷部

不許複製

發兌 東京市京橋區尾張町二丁目十五番地 警醒社書店 振替東京五五三番

原田助先生譯述

耶蘇之時代

附錄　猶太の地理及曆一班

定價上製八十錢
並製六十五錢
郵稅各八錢

耶蘇の性格を究めんとするものは須らく新約全書の記事の外別に其時代に溯りて特に世界の形勢制度文物思想を參照するの要あり蓋し二千年の星霜は人類の狀態を一變して想像以外の懸隔を生ぜしめたればなり本書は獨逸の碩學サイデル博士の原書に基き補譯されたるものにして所謂隔靴搔痒の感を除きて單に新約聖書研究者に必要なる知識を增進するのみならず津々たる興味を以て之れに親炙するの裨益を供せり斯道に志あるもの一讀せざるべからざる良書なり

發兌　東京市京橋區尾張町二丁目　警醒社書店　振替東京五五三番

525
100

020787−000−7

325−100

信仰と理想

原田　助／著

M42

ABI−0613